

「生きゆけるかしら」



兵

兵庫県立東播磨高等学校校舎竣工記念誌
(1976年5月)
21～22ページ

<解説>

26歳で、普通科の高校の教員になりました。

大学浪人1年、留年2年、大学院浪人1年、そんなつもりもなかったのですが、結果的にはそういうことになってしまいました。

新設3年目の高校は、2年間の仮校舎住まいを終えて、新校舎に移転しました。その記念誌に寄せたもので、残っている数少ない高校教員の頃の文章です。

新任研修の翌日の4月2日、職員室に足を踏み入れたとたん、一日も早く辞めて、「空間」を確保出来る場所を探さなければと思いました。しかし、結局は、7年間を高校の教員として過ごしました。

一年目は、担任なしの教務担当、2年目から4年間は学級担任、6年目、7年目は在籍したまま、教員再養成のために新設された大学院の修士課程に通いました（大学には、あまり行きませんでした。）

「生きゆけるかしら」

河川敷を歩みて一歳 過ぐしけり 春に蒲公英 まう枯れ薄

こんな風な和歌を詠みながら、気負ってみせて、毎日河原を歩きまわっていた生活と、毎日学校に来る生活と一体何の違いが、ぼくには、あるだろう。結局、青春の無軌道でしかないのだろうか。挫折。希望。挫折。夢。シェイクスピアも続きたい。フロイトも。朔太郎も。ナイアガラにも行ってみたい。太宰さんを越えたい。ライトの作品も続きたい。体が、こちこちに張っても、強心剤を打ってでも。だけど生きる命題が見つからない。法華経を読んだ。長いこと。

「玉田、お前は読み方がたらんぞ。」だれかしら、思いくそ、しかりとばした。読んでわかるのかしらん。かといって死ぬ命題も見つからない。「川端さんが死んだ理由が、何となくわかります。」

「無茶いわんで下さいよ、玉田くん、二十代の君にわかったら困りますよ」

ぼくの好きな恩師と呼び得る人がつぶやかれた。36の坂まであと10年。生きゆけるかしら。

旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる。

十代に涙した。暗闇の寝間の中でふとんをかぶりながら。涙がどうしてもとまらなかった。秘すれば花、秘せずば花なるべからずとなり。ああ、わかった風のことを。